

【口語訳】

(命婦は)母君(桐壺更衣)からの贈り物をご覧に入れる。(帝は)これが亡き人のすみかを探し当てた証拠であるならば、とお思いになるが、甲斐のないことである。

(桐壺更衣の魂を)探しに行く幻術師がいてほしい。(そうであれば)人伝てにでも魂のありかをそこ知ることができように絵に描いてある楊貴妃の容貌は、優れた絵師だとしても筆力に限りがあるので、生き生きとした美しさが乏しい。太液池の芙蓉、未央宮の柳も、実に(楊貴妃に)似かよった容貌を、唐風の装いは実に麗うるわしいだろうが、(それに比べ桐壺の更衣が)親しみやすく可憐であったことを思い出されると、(その美しさは)花や鳥の色や声にもたとえようがないのである。朝夕のお話しに比翼の鳥、連理の枝となろう、とお約束されたのに、叶うことがない命のはかなさが限りなく恨めしいことである。